

漢魏洛陽城穀水水文考

鹽 澤 裕 仁

はじめに

一 引穀について

二 大城西側の穀水水系

三 大城を環流する穀水水系

四 大城東側の穀水水系

五、金谷水と金谷の所在

結 語

はじめに

現在、東洋文庫前近代中國古代地域史研究班では『水經注疏』の輪讀を進めている。⁽¹⁾朱謀埠・全祖望・趙一清・戴震の校勘成果に楊守敬・熊會貞が施した疏文は細緻の極みといっても過言ではない。『水經注』考證の到達点において楊熊の疏文に勝るものではなく、その研究成果を踏まえての議論は不可缺である。しかしながら、考古學資料や地理情報を踏まえた分析を試みる中で、疏文の議論が机上の空論であることもしばしば認識され、また錯簡や衍文が隨所で確認されたことから、疏文の内容に限界を感じざるを得なかった。而して現地での地勢環境調査の必要性を痛感し、『水經注』が描き出す時代の中心地でありながら研究情報の開示という點で遅れが否めない洛陽にて研究活動を始めるにいたった。斯して五

年に亘る洛陽滯在中に盆地のほぼ全域において踏査を実施したが、その過程の中で特に問題にすべきと考えたのが都城の存立環境である。その中でも水環境は『水經注』の考證に止まらず都城の存立條件を考える上にも極めて重要な課題であるといえる。⁽²⁾ 然るに、洛陽盆地における都城（現在遺構が確認されている二里頭・偃師商城・東周王城・漢魏洛陽城・隋唐洛陽城）はすべて洛水（洛河）の河流を機軸として營まれてきた。そのため、研究の視點が洛水に集中してきたのは否めない。しかし、漢魏洛陽城の立地ならびに河床、水質、水量など河川の性質をみるに、穀水（谷水、澗河）という洛陽盆地では第三の河川の存在が、その存立を支える水環境としては必要な要素であることが認識された。すなわち、穀水に對する精確な情報は、漢魏洛陽城を研究する上で缺くべからざる基礎資料となり得るものである。よつて本論では、筆者が洛陽滯在中に斷續的に實施してきた地勢調査の情報を公開するとともに、水系關連遺跡の立地狀況や新たな發掘情報を踏まえ、穀水の河道復元、ならびに都城の存立環境における穀水の位置づけについて考えてみたい。

一 引穀について

洛水舊河道⁽⁴⁾と漢魏洛陽城大城北端⁽⁵⁾との距離は約五キロ、この區間で一七メートルもの比高がある（標高・朱圪塔村南…一九一メートル、龍虎灘村東…一二三メートル、龍虎灘村北三二〇國道沿…一二四メートル、韓旗屯村西…一二八メートル、金村南…一二三二メートル、金村内中州渠南…一二三六メートル、各地點の間隔約一キロメートル）。この南北に一／二九四という勾配を克服して洛水から引水することは現實的ではない。すなわち、洛陽郊區で一／一〇〇強、偃師で一／二四〇〇という河床勾配をもつ洛水の性格からして数十キロ上流からの引水（王城大橋西側の標高は一三七メートル、現在當地より東に漢魏洛陽城の北部を経て偃師まで中州渠が引かれている⁽⁶⁾）ならまだしも、近傍での取水は事實上不可能であり、別の水系を活用し溝渠によつて都城に導く方法が採られることになる⁽⁷⁾。では、その水源を何處に求めることになるのか。漢魏洛陽城の西方で非季節性と安定した水量の確保という條件を備えている河川は穀水のみである⁽⁸⁾。穀水、即ち現在の澗河は、河南省陝縣觀音堂に源

を發し、澠池縣・新安縣を経て洛陽市（郊區）に入った後、市街地の西部にある東周王城（以下王城という）遺址の西側を南行して澠西區興隆寨の東南にいたって現洛水に入る。⁽⁹⁾ その全長は一〇四キロメートル、流域面積は一四三〇平方キロメートル、河床は亞粘土質で、河床勾配は一／二三八である。洛陽盆地第三の河川にして濁水のない穀水こそ漢魏洛陽城という巨大都市を維持する生命線と成り得るのである。この穀水を導くための溝渠を陽渠と稱する。陽渠の創設については、漢魏洛陽城の基礎となった成周築城の際に周公旦が開鑿したとする記事が『水經注』卷一六穀水條に載せられている。しかし、城の周圍に陽渠が設けられたとするものであり、その水源を何處に求めたかは明確にならない。漢魏洛陽城の築城に係る問題として研究者が注目する史料は以下の二つである。

『後漢書』卷二二王梁傳

數月徵入、代歐陽歛爲河南尹。梁穿渠引穀水注洛陽城下、東寫鞏川、及渠成而水不流。（數月にして徵されて入り、歐陽歛に代りて河南尹となる。（王）梁、渠を穿ちて穀水を引き洛陽城の下に注し、東して鞏川に寫がんとせしに、渠の成るに及びて水流れず）。

『後漢書』卷三五張純傳

明年、上穿陽渠、引洛水爲漕、百姓得其利（明年（建武二四年、紀元四八年）、上りて陽渠を穿ち、洛水を引きて漕となすに、百姓はその利を得たり）。

王梁の事業は「穿渠引穀水」を以て「引穀」と稱され、張純の事業は「水經注」穀水條に「堰洛水以通漕」と記されることから「堰洛」と稱される。では両者がともに穀水からの引水を指しているかというに、後者の扱いをめぐって陽渠そのものに對する認識も異なる。以下に代表的なものを示す。

- ① 陽渠とは、城南にあって洛水の水を引き東流して偃師にいたって再び洛水に入るもので、前漢長安の灌渠に倣ったもの⁽¹⁰⁾。具體的に大城の西南、現偃師市東新庄附近にある洛水の新舊河道の分岐點に堰洛事業の渠首を設定する見解も

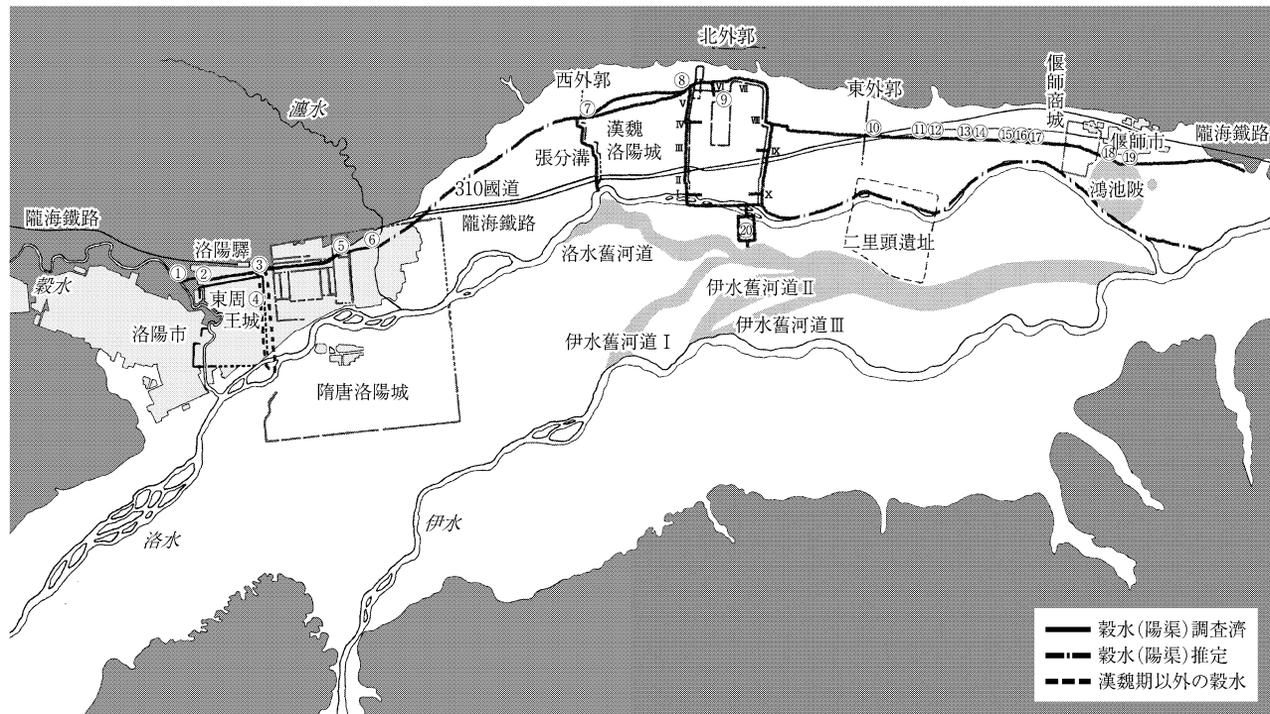
ある。⁽¹²⁾

② 陽渠とは、その渠首が漢の河南縣城の西南にあり、洛水を引いて同縣城の南を經、北に穀水を穿つた後、元々存在していた舊渠道（王梁の開鑿）を利用して京師に引き込み、太倉、鴻池陂を經て偃師で洛水に入るもの。⁽¹³⁾

③ 陽渠とは、洛陽城（外郭）外の東南角において洛水を引いて北上させ、（漢）上東門の東七里で西に折れ、上東門外にいたつて環城の河流に繋がるもの。⁽¹⁴⁾

論點は「引穀」と「堰洛」とが同一（ある地點での合流も含む）の溝渠を指す②か否か①③で異なる。兩者が全く異なる事業だとすれば渠道も別々のものが存在してしかるべきである。しかし、『水經注』『洛陽伽藍記』ともに大城西南隅での渠道を記していない。假に存在するとしても、北高南低の地勢上それは城南に限られ、また暴れ川である洛水の氾濫を被る危険性も極めて高い。このような點から城南において洛水からの單獨溝渠を引くとする①の認識には贊同しがたい。⁽¹⁵⁾これに對し、郭緣生の『述征記』（太平御覽）卷一九〇居處部に引く）に「舊於王城之東北開渠、引洛水、名曰陽渠（もと王城の東北において渠を開き、洛水を引く、名づけて陽渠という）」というように、王城の東北において穀水（河道あるいは舊渠道）に洛水から引いた渠道を合わせることは可能である（洛水北岸の段丘上を西南から東北に流れる現在の中州渠の存在が參考になる）。したがつて、筆者としては②が妥當な解釋であると考へているが、現時點では決定的な材料を持ち得ず、今後の考古學の成果を期すことにしたい。なお、③は現地の地勢（後述）からみて現實的に成立し難い。

以上「引洛」「堰洛」をめぐる議論には今一步の考證が求められるが、『水經注』穀水條には「堰洛」について「是渠今引穀水、蓋純之創也（これ渠、今は穀水を引く、蓋し純の創りしものなり）」と述べ、さらに穀水からの引水に係る水系を穀水の本流（陽渠、陽渠水、千金渠とも記される）として扱っている。酈道元の時代には穀水の流が漢魏洛陽城の西北へと導かれていたことは明確である。よつて本論では、穀水すなわち陽渠を一つの水系として捉え、その流路について大城西側（引水）、大城（環流）、大城東側（排水、漕運）の三段に分けて論述していくものとする（圖一）。



圖一 穀水（陽渠）河道圖（中國社會科學院考古研究所洛陽分館提供「洛陽古代都城地勢圖」を基に作成）

圖二 東周王城西北の五女冢で確認される穀水舊河道（矢印は河道北岸線）と現河道の分岐點

Base: CORONA satellite photographs are available from U. S. Geological Survey, EROS Data Center, Sioux Falls, SD, USA.

二 大城西側の穀水水系

『水經注』穀水條には「（穀水）又東過河南縣北、東南入于洛（穀水）また東して河南縣の北を過ぎ、東南して洛に入る」⁽¹⁶⁾「穀水又逕河南王城北（穀水また河南王城の北を逕る）」⁽¹⁷⁾「洛水在王城南、穀水在王城北、東入于瀍（洛水は王城の南にあり、穀水は王城の北にあり、東して瀍に入る）」などとみえ、王城の北側を穀水が通過していることが窺える。現河道はこれらの内容とは異なり王城遺址の西部を南に向かい遺址の西南で現洛水に流入する。筆者は『水經注』の記載内容を頼りに王城遺址の西北部を調査し、西工區五女冢の北部において舊河道の痕跡を確認した（圖二）。そして、洛陽驛周邊の微妙な高低差を有する地勢より舊河道が五女冢から隴海鐵路沿いに東に向かっている點を指摘した。⁽¹⁶⁾この指摘は二〇一一年末に發表された王炬（洛陽文物工作隊）「谷水與洛陽諸城址的關係初探」において實證されることとなった。⁽¹⁷⁾当該論考には現地考古隊のボーリング調査報告（①西工區の紗廠西路と王城大道の交差點にあるフォルクスワーゲン販賣店敷地内における幅（南北）約一〇〇メートルの淤土（河床に沖積した泥砂）層、②西工區の道

南路南側の中儲八〇一倉庫内における幅(南北)約一〇〇メートルの淤土層⁽¹⁹⁾、③老城區環城北路の九龍臺における幅(南北)八〇メートルの淤土層⁽²⁰⁾が示されている。非公開の内部資料であるため閲覧は不可能であり直接検証する機会はないが、河道痕を捉えた資料の存在が確認できたことは意義深い⁽²¹⁾。

この他、七一路周辺の低地の状況から、洛陽驛の東側で屈折し王城の東城壁と平行に南下して現洛水に至る河道も想定された⁽²²⁾。この想定も、二〇〇四年に行われた唐宮路北側の王城東城壁發掘調査によって實證されている⁽²³⁾。報告によると二期に渡って築造された城壁(西側Ⅰ期夯土・戰國前中期、東側Ⅱ期夯土・戰國中後期)の兩側で水溝の遺構が確認されている(圖三)。Ⅱ期夯土は東側の水溝遺構(編號G1)を埋めた後その上に築造されたものであり、水溝遺構の幅は調査区域内で確認されただけでも一〇メートル(遺構は調査區域の東側にさらに擴大)となつてゐる。またⅠ期夯土の西側にある水溝遺構(編號G2)の淤土層からは小型の淡水巻貝が検出されてゐることより、水溝は河道であり、Ⅰ期夯土側面の護岸層(戰國中後期)の外側にあることから漢から唐にかけての遺構と考えられてゐる(遺構は調査區域の西側にさらに三〇メートルほど擴大)。修築を重ねながら唐代まで活用されてきた王城東城壁の兩側に時期の異なる水溝が存在していたことが理解される。二〇一〇年九月から一〇月にかけて光華路中央部西側の洛陽市蔬菜副食品有限公司敷地内(洛陽驛東バスターミナルの東南)で實施された發掘調査でも全く同様な状況が確認されている(當該現場における唐代河水遺構の幅は二六・七メートル⁽²⁴⁾)。兩調査現場は南北の位置關係にあり、この調査結果から王城の東北區畫における唐代以前の水環境が把握された。

ところで、隴海鐵路沿いに穀水の舊河道を描くと、その河道は必然的に含嘉倉の區域内を通過することになる。然るに、洛陽市博物館の調査報告「洛陽隋唐含嘉倉的發掘」掲載の圖版(圖四)では、老城(金明清洛陽城)北關、すなわち含嘉倉城遺址内における河道痕(幅約一〇〇メートル、河道内の沖積約一二メートル)および河岸埠頭址(河道痕の北側に弧を描くように張り出した地形。細かく砕いた石で舗装された地面と護岸用欄干柱洞四基がある。柱洞は一邊〇・二メートルの方形、深さ約〇・三メートル)が確認できる⁽²⁵⁾。遺構の状況は、「大業雜記」にみる「西拒王城、東越瀍澗、南跨洛水、北踰谷水(西は王城を拒

①現代層 ②唐代層 ③唐代層 ④漢代層

圖三 東周王城東城壁遺址調査断面圖（トレンチ1）（「洛陽東周王城東城壁遺址二〇〇四年度發掘簡報」より轉載、筆者一部修正）

圖四 含嘉倉内の穀水河道および埠頭遺址（「洛陽隋唐含嘉倉的發掘」より轉載、筆者一部修正）

み、東は灋澗を越え、南は洛水を跨ぎ、北は谷水を踰える」に符合する。この河道痕について、王炬は隋唐洛陽城陶光園内の渠水の存在と関連付け、城内に穀水の本流を直接引き込んでいると考えている⁽²⁶⁾。しかし、河床勾配が大きく氾濫の多發する穀水の本流を城内に引き入れるのは治水の點で危険性が高く、また西郭城壁、含嘉倉城壁などを通過することから構造的、防衛的にも問題があり現実的ではない。假に城壁下を河水が通過するとしても、そのためには極めて大掛かりな（石造）水利施設が必要となるが、そのような大規模な遺構は頻繁に實施されている當該地區の考古學調査でも確認されていない。然り乍ら、皇城の西北部に設けられた九洲池の存在を考えるに、その給水源とされる水系は確保されていなければならない。以前筆者は穀水の河道は隋唐洛陽城の西郭城壁の手前で改道されている點を指摘した⁽²⁷⁾。この點は上述の王城東城壁の發掘調査によって證明されたわけであり、圖四をみるに河道痕を掘り抜いて倉窖が作られていることから北魏以前の穀水河道がそのまま機能していたとはいえない。このような點から、舊河道を部分的に利用しながらも規模を相當に縮小した幅の狭い細渠が新たに開鑿され、西郭城壁の下から陶光園に引き込まれて九洲池をはじめとする城内の苑池に給水したと考えるべきである。このとき細渠は陶光園内を東西に貫通することになるため、幅は狭くとも内濠の役割を兼ねていたといえよう。

以上、穀水の河道に如何ほどの造成が加えられたかは判然としないが、ボーリング調査報告からみるに幅一〇〇メートルに達する河道（あるいは渠道）であったこと、現在の隴海鐵路沿いに穀水が東流していたことは明確である⁽²⁸⁾。然るに、ここにおいて一つの重要な問題を考えなければならない。穀水（河道あるいは渠道）が灋澗水を跨がなければならないという問題である。

灋澗水すなわち現在の灋澗河は孟津縣横水郷會灋澗に源を發する全長三五キロメートルの河川で、河床は粘土および亞粘土質、非増水期には涸れて斷流する季節性の強い極めて厄介な河川である。穀水がこのような性質をもつ灋澗水と交差するという状況からして相當に大掛かりな水利施設が必要となる。『水經注』卷一五灋澗水條に「灋澗水又東南流注于穀、穀水自千

金場東注、謂之千金渠也（灑水また東南流して穀に注ぎ、穀水は千金場より東に注ぐ、これを千金渠というなり）」とあることからも、千金場とは穀水の跨瀆問題克服のために灑水（あるいは合流後の灑穀水）に築かれた堰堤であるとみて間違いない。⁽²⁹⁾

穀水は千金場からさらに東に延び漢魏洛陽城まで至るが、灑水以東と西外郭張分溝遺址以西の間における渠道遺構については未調査である。渠道は象庄村の西南西にある西外郭の附近より東側で確認され、張分溝を含めて三支に分流する（圖一）⁽³⁰⁾。北側の渠道は残長三八〇〇メートル・幅一〇～一五メートル・淤土層の厚さ二～二・五メートル、南側の渠道は残長三五〇〇メートル・幅二〇～三〇メートル・淤土層の厚さ三～四メートルである。『漢魏洛陽城遺址研究』前言において漢魏工作隊の隊長である錢國祥は南道の出現が北道よりも遅く使用期間も長期に及んだと考えている。しかし兩道が並行して使用されていたか否かについては觸れていない。張分溝について考古隊の調査では大城Ⅳ號城門から西に延びる大道（通稱闔門大道）と西外郭との交差地點（齊郭村と龍村の間）の南側より現洛水に至る間の約二八〇〇メートルを検出している。幅は一五～三〇メートル、北が狭く、南に下るほど廣くなっている。⁽³¹⁾

三 大城を環流する穀水水系

社會科學院考古隊が七三年と九三年に發表した二つの報告書（以下七三年報告、九三年報告という）には、金墉城（甲・乙・丙城の三城）⁽³²⁾の周圍を含めて大城の城壁遺構の外側に設けられた護城河（外濠）の痕跡が示されている。

七三年報告によると、穀水の河道が護城河に流れ込むのは翟泉村の東北にある村寨牆の内側であるとされる。當地では西側から流れ込む一條の比較的規模の大きな淤土の沖積溝が発見されている。この沖積溝は甲城の西南部で三支に分流する。

第一支は南流する。乙城と丙城の西城壁の外側を城壁に沿って南へ流れ、大城の西城壁にある諸々の城門の前を順次通

過する。淤土層の厚さは三〜四メートルに達し、河幅は北側より一八、二二、二四、二八メートルと南に向かうほど廣くなっている。河道と大城の西城壁とは一定の間隔を保っている。IV號城門（漢上西門、北魏閭闔門）では城内への引水渠の遺構が確認されている。⁽³⁴⁾

第二支は東流する。乙城の北部を東西に貫通し、その後折れ曲がって東南に流れ、金村の西部VI號城門（漢夏門、北魏大夏門）のところで大城に流れ入る。引水渠の遺構は確認されているが、流入後の流路は未調査である。丙城が魏晉の金墉城ならば、金墉城の北を東流する（『水經注』、『洛陽伽藍記』）という陽渠はこの河道遺構ということになる。

第三支は北流する。甲城の西城壁の外側を通過し、甲城を環流して翟泉村の東側で東に折れ、第二支に平行して東に向かう。両者が何處で合流するかは明らかではない。第三支の開鑿については甲城の築造と同一時期で隋末の李密によるものと考えられている。⁽³⁵⁾

甲城より東に約三〇〇メートル行つた中州渠の南側（金村の北）で河道の遺構（第二支に繋がる）が再び現れ、東に流れて大城の東北の角に至る。⁽³⁶⁾ 河道痕は北城壁と平行しており、その間隔は二〇〜三五メートル、河道の幅は二〇〜二四メートル、淤土層の厚さは四メートル以上に達する。さらに河道は大城の東北の角を経由した後、南に折れ曲がり、東城壁に沿って南に向かう。その途中でⅧ號・Ⅹ號・Ⅹ號城門の前を通過する。河幅は一八、二九、四〇メートルと南に向かうほど廣くなっている。淤土層の厚さは三メートル以上に達する。

大城の南側では太學・辟雍、明堂、⁽³⁷⁾ 靈臺遺址が確認されている（圖五）。これらは禮制・教育に關する重要な建築であり、その建築群の立地をみるに、大城南城壁（城壁遺構の直上を現在洛水が流れている）の外側にあつて、洛水舊河道が南に大きく灣曲する部分の北岸に集中している。上述の南行した第一支は大城の西南で東に折れ、南城壁沿いに禮制・教育建築群の北側を東行していた。建築群のなかで筆者が最も注目しているのが明堂の東に位置する辟雍である。當該遺址はすでに發掘されており、洛陽城の水系を論じる上に極めて重要な資料が提示されている。⁽³⁹⁾ 東西約四六メートル、南北約三三

圖五 漢魏洛陽故城南郊禮制建築遺址分布圖（『漢魏洛陽故城南郊禮制建築遺址』より轉載）

メートルの大型方形基壇が遺構の北寄りに配され、その四面に門闕がある。遺構全體は一辺約一七〇メートルの正方形を呈しており、北・東・西の三面では水道（環水溝）遺址が確認されている。調査報告によると水道は、現洛水南岸の築堤より一八〇メートル・幅四～五メートルで直線的に南下し、大型方形基壇の北一五六メートルのところまで東西に分かれる。西には一八〇メートル直行した後左に折れて再び南に向かう。現在南端は地下水位が高いことより未探査であるが、南行する部分の残長は約四〇〇メートルである。東にも一八〇メートル直行した後右に折れて再び南行する。こちらも現在南端は確認されていないが、南行する部分の残長は約四六〇メートル（約一八〇メートル南行、屈折後約三〇メートル西行、屈折後約二五〇メートル南行）である。水道遺構の調査から理解するところでは、北側より水を取り入れ、東西に分流するかたちで建築物の周囲を環流させていたと思われる。ところで、大城を環流する流れは何處に通じていたかというに、「穀水周圍遶城、至建春門外、東入陽渠石橋（穀水は周りに圍みて城を遶る、建春門の外に至りて、東に陽渠

圖六 楊守敬『水經注圖』「洛陽城圖」

の石橋に入る)」（『洛陽伽藍記』卷二城東）や「洛陽城外四面有陽渠水。卽周公所制。池上源出（萬氏延蘭本は『注』と記す、本論は四庫全書に據る）函谷、東流注城西北角、仍分流、繞城至建春門外合流。又折而東流注于池」（洛陽城外の四面に陽渠水あり。卽ち周公の制するところなり。池の水源は函谷に出で、東流して城の西北の角に注し、仍りて分流し、城を繞り建春門の外に至りて合流す。又折れ而して東流して池に注す）」（『太平寰宇記』一卷三河南府洛陽縣故洛陽城十二門に引く『輿地志』）などから建春門（Ⅷ號城門）の前で合流し東に延びる渠道に流れ込むと考えられている。然れども、北高南低にして一七メートルもの高低差を有する漢魏洛陽城では水は北から南に流れるのである。東西城壁の外側における護城河は北狹南廣であり、構造的にも水流は南行していると考えべきである。『水經注』の記載のごとく護城河の形状は南より東に回り込んでいるが渠水が北に流れるという理解は錯誤である。然るに、この状況において一つの問題が浮かび上がる。Ⅷ號城門外で渠水は東と南とに分流するのであり、西護城河から南護城河に回り込む流水は東護城河を南行する流水と大城の東南において衝突し捌け口を失い滯流を引き起こしてしまうことになる。こ

ここに先述した辟雍の環水溝が想起される。北部引水口は正に大城の東南部に當たる。北部水溝のみが砌磚造りであることも滯流を回避する引水口という状況下で考えるならば構造を補強するという點で納得がいく。北側の南護城河、すなわち陽渠から引水し辟雍の周圍を環流させて洛水に排水するならば、上記の滯流問題は幾分解消されることになる。しかし、大城から排出される大量の流水は幅五メートル程度の辟雍の環水溝だけで處理できるとも思われない。ここで「穀水于城東南隅、枝分北注（穀水は城の東南隅において、枝分れし北に注ぐ）」（『水經注』穀水條）という内容に着目する必要がある。すなわち、枝分かれしたもう一條の溝渠が存在して然るべきであり、楊守敬も『水經注圖』「洛陽城圖」において東行する溝渠を描出している（圖六）。大城の東南部は洛水の現河道下にあることから考古學調査も不可能であるが、上述の滯流と排出に對する疑問點、並びに後述する偃師考古隊の報告内容を勘案するに、東南隅から排水に係る分枝が出ていたと考えるべきである（次章にて詳述⁽⁴⁾）。

四 大城東側の穀水水系

大城の東側、東外郭内における水系はというに、考古隊が大型の漕運水道として認識しているものがある⁽⁴⁾。大城のⅧ號城門の外側では、城内から流れ出した排水渠（暗渠）と大城の外側を北から流れてくる護城河（陽渠）とが合流する。門外の大道（通稱建春門大道）に沿ってその北側を七〇〇メートル東行し、その後大道の南側に出、東南東に向かい大石橋村の南側を経て白村の北側で東外郭と交差する。この間の殘長三八〇〇メートル、一か所の屈折部がある以外ほぼ直線である。大城東壁から大道と交差するまでの七〇〇メートルの部分の幅は九〇～一〇〇メートルもあり、淤土層の厚さは二メートルである。また交差後大道の南側を東行する部分は幅三五～六〇メートル、地表面から一〇メートルの深さに淤土の沖積がある。この極めて幅の広い直線の渠道は大型船舶の航行を想起させるものであり、考古隊の大型漕運水道という認識も支持されよう。晉の馬市（東市）や常滿倉（常平倉）、北魏の太倉や租場といった市場や糧倉の立地環境を考えるた

めの貴重な情報でもある。

以上の内容は東外郭内の水系に關してのものであるが、昨今偃師考古隊による積年の調査結果「漢魏洛陽城東陽渠・鴻池陂考古勘察簡報」も公開された。⁽⁴²⁾ 當該報告は、①東外郭より東に向かい偃師商城内を通過して鴻池陂に至る區間（以下東陽渠西區という）、②鴻池陂遺址、③鴻池陂より東に向かい偃師老城を経て現洛水に注ぐ區間（渠道遺構は東屯村東山嘴の南まで。合流部附近の遺構は現洛水の氾濫により消滅。以下東陽渠東區という）の水系遺構を検出したもので、社會科學院漢魏洛陽城考古隊の調査を補充して餘りある極めて重要な成果である（圖一）。

① 東陽渠西區の渠道遺構（一二六〇〇メートル）

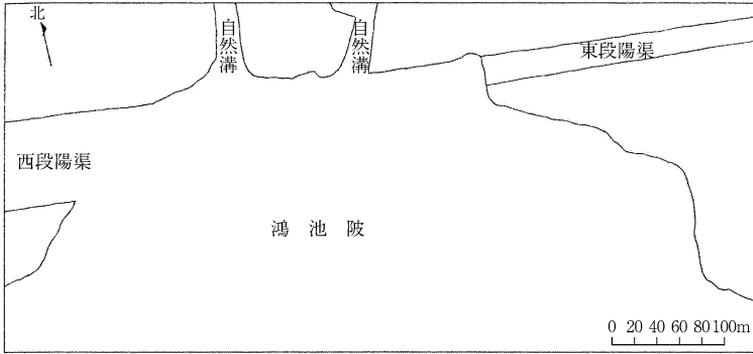
韓旗屯村の東北（北魏建春門遺址の東）―白村の北・隴海鐵路の北約一〇〇メートルの地點（北魏東外郭）―華潤發電所の南（隴海鐵路と交差）―羊二庄村の西北（三一〇國道と交差）―南蔡庄村の北―大家頭村の北―前杜樓村の南―偃師商城遺址の中央部⁽⁴³⁾―偃師實驗中學の南

渠道遺構は黃褐色土層（唐宋期もしくはそれ以降）の下にある紅褐色土層（漢魏期）の中で確認されている（漢魏洛陽城東外郭―南蔡庄村・幅六六〇～七七メートル、南蔡庄村―前杜樓村・幅七〇〇～七五メートル、前杜樓村―偃師商城・幅六八〇～七五メートル、偃師商城―鴻池陂址・幅七六〇～八〇メートル）。渠道遺構内の沖積は大家頭村の北側を境としてその東西で異なる（以西・黃褐色の含砂淤土。以東・上層は赤茶色の粘土狀淤土、下層は青褐色の淤土）。渠道の側壁は基本的に垂直である。

② 鴻池陂遺址

偃師商城遺址の東南部（東・高庄村の西約三〇〇メートル地點、西・塔庄村の東で三一〇國道の東側、北・洛神路の南七〇メートル地點、南・洛水の改道により消滅⁽⁴⁴⁾）。

鴻池陂の遺構も漢魏期の紅褐色土層中で確認されている（沖積は五メートル以上、底部は未確認）。形状は不規則な楕圓形を呈する（東西約一四八〇メートル・南北約八〇〇メートル）。池邊はその殆どが緩傾斜をなしているが、西北の陽渠が流



圖七 鴻池陂遺址および東陽渠西區渠道（西段陽渠）と東區渠道（東段陽渠）（「漢魏洛陽城東陽渠・鴻池陂考古勘察簡報」より轉載）

入するところでは垂直である。沖積の状況（上層…赤茶色の粘土状淤土、下層は青褐色の淤土）からみて東陽渠西區の渠道と鴻池陂とは同一時期のものと考えられている。ただし、西側から流入する陽渠の影響で鴻池陂の北壁は自然と擴張していき③に述べる東陽渠東區を断ち切ることになったとする考古隊の見解には疑問が残る（圖七）。北より流れ込む二條の自然溝との関係も含め鴻池陂北部の状況は今後を期す問題といえる。

鴻池陂遺址の東側ではもう一つの池沼遺構が確認されている（東西三〇〇メートル、南北一五〇メートル）。沖積状況（茶褐色の腐植質澄土と青褐色の淤土）は鴻池陂と異なっているが、時期を同じくする単一の池沼あるいは流水調整池と考えられている。

③ 東陽渠東區の渠道遺構（五八〇〇メートル）

華夏世紀城（マンション街區）敷地内—偃師老城區の北—山化郷湯泉村の東南（中州渠と合一）—東屯村東山嘴の南

渠道遺構は黄褐色土層の下にある漢魏期とされる薄紅色土層中で確認されている（鴻池陂址—偃師老城・幅二五—三三メートル、偃師老城—東屯村・幅三〇—三三メートル）。渠道遺構内の沖積層は薄紅色の花土で、底部に若干の淤土が確認されるに止まることから流水の有無が問題とされる。渠道の側壁は緩傾斜をなしている。

④ 南北に走る自然溝（表一）

表一 東陽渠調査区内で確認された自然溝

| 番號 | 所在地 | 探查區 長さ(m) | 幅(m) | 堆積層 厚さ(m) | 地表下 深さ(m) | 堆積土 | 陽渠・鴻池 との關係 | 對應關係にあ る岡山開析谷 | 圖一中 の番號 |
|----|------------|--------------|-------|--------------|--------------|----------|---------------|------------------|------------|
| 1 | 白村北より磚殿路 | 450 | 35-45 | 7 | 1-2 | 砂を含んだ沖積土 | 陽渠に注す | 形溝東溝 | ⑩ |
| 2 | 南祭庄村内・第三醫院 | 15.5 | 10.8 | 8,6底部未到 | 3.6 | 沖積土 | 陽渠に注す | 簸箕山西溝 | ⑪ |
| 3 | 首陽山環球船廠 | 28 | 19 | 7,5底部未到 | 4 | 沖積土 | 陽渠に注す | 簸箕山東溝 | ⑫ |
| 4 | 香玉村南 | 178 | 39 | 9底部未到 | 4.8 | 沖積土 | 陽渠に注す | 香玉北溝 | ⑬ |
| 5 | 香玉村東南 | 170 | 9 | 9 | 4.8 | 沖積土 | 陽渠に注す | 墳庄北溝 | ⑭ |
| 6 | 前杜樓村南 | 188 | 43 | 7底部未到 | 2.8 | 紅色粘土・沖積土 | 陽渠と交差 | 大洞溝 | ⑮ |
| 7 | 前杜樓村東南 | 60 | 58 | 7,8底部未到 | 1.5 | 沖積土 | 陽渠と交差 | 大東溝 | ⑯ |
| 8 | 吓天藥村西南 | 60 | 52 | 8 | 1.5 | 沖積土 | 陽渠と交差 | 楊羅坡西溝 | ⑰ |
| 9 | 新新路の東35m | 45 | 16.5 | 6.5 | 2 | 沖積土 | 鴻池坡に注す | 宮家橋溝 | ⑱ |
| 10 | 華夏世紀城 | 62 | 25 | 22 | 2 | 沖積土 | 鴻池坡に注す | | ⑲ |

鴻池坡に流入する二條を除くと前杜樓村の近傍の三條のみが陽渠の遺構と交差しており、香玉村以西の五條は陽渠に流入するに止まる。この陽渠にて止まる自然溝は基本的に陽渠開鑿後のものと考えられているが、陽渠の沖積層を縦断していないことより陽渠放棄と時期を同じくして岡山山麓の水環境に變化(氣候變動による濁水)が生じたことも想定される。また報告書では『阮嗣宗集』第六四首にみえる九曲の存在に觸れ、確認された自然溝の内の九條を指すとするが、酈道元は『水經注』穀水條で周公の陽渠開鑿について觸れた後に陽渠そのものが九曲瀆を指すと記す。九曲とは屈曲の多いことを示す定番の表現であることから、九曲瀆とは屈曲を重ねる陽渠の形状を示した通稱と解釋すべきである。⁽⁴⁷⁾

以上、東陽渠の發掘報告から分かる問題点を整理すると以下の點が指摘できる。

① 大城以東における二條の陽渠の存在。

東陽渠の遺構は考古調査ではほぼ直線である。これに對し、『水經注』穀水條に「穀水又東、左池爲池、又東、右出爲方湖（略）。穀水又東、南轉、屈而東注、謂之阮曲（略）。穀水又東、注鴻池陂（穀水また東して、左池めに池を爲し、また東して、右に出で方湖を爲す（略）。穀水また東して、南に轉じ、屈して東に注ぐ、これを阮曲と謂う（略）。穀水また東して、鴻池陂に注ぐ）」と記されるような左右に折れ曲がる渠道（穀水）の形状は趣を全く異にする。また、自然溝まで検出してある考古隊の詳細な報告ではあるが、「（無名）池」や「方湖」といった湖沼の遺構は確認されていない。これらの點から右の穀水條の件は前章末に述べた大城東南隅の分枝の一支として理解すべきであり、大城の東城壁からは二條の渠道（いずれも陽渠と稱される）が引かれていたと考えなければならない。謂わば、考古隊によって確認されている北魏建春門から東行する渠道（洛陽溝とも稱す）が陽渠北道、大城東南隅から屈曲を重ねて東行する渠道が陽渠南道となる。⁽⁴⁸⁾現在の洛水が漢魏洛陽城の大城南城壁上を通過し、大きく蛇行しながら偃師市街地の南に向かっているという地勢を考えてみるに、大城の東南隅から東に延びる陽渠南道（九曲瀆）の直上を現在の洛水の河道が通過しているという想定も可能である（圖一）⁽⁴⁹⁾。

② 幅の異なる鴻池陂東西の渠道。

東陽渠の西區と東區とは直線的に繋がるものの、その幅が大きく異なる。また、東區は斷ち切られており、沖積狀況も異なる。報告では、元來一條の人工渠として開鑿されたものが、改修を重ねるうちに渠幅が異なるようになったと考えている。また、七、八〇メートルもの渠幅を持つ西區の使用頻度は東區に比べ遙かに高かったと指摘する。⁽⁵⁰⁾確かに西區の西端には太倉（常滿倉）も設置されていることから、漕運に活用されたことは間違いないであろう。ただし、漕運という點を考えるならば、物資は洛口（鞏縣）方面から搬入されることから船舶は東側からの入渠を想定すべきであり、鴻池陂に先に入る東區が規模の點で劣るのは不可思議である。『水經注』穀水條には「穀水また東して偃師城の南を逕

る」とあり、現在の偃師老城がここにいる偃師城であると考えるに、⁽⁵¹⁾鴻池陂遺構の東南邊りに東側から入る別の渠道の存在を想定しておくべきであろう（地勢からみるに現洛水の氾濫原の下にあるという可能性は否めない）。

五 金谷水と金谷の所在

逸文を蒐集した『水經注』には當然その編纂段階において錯簡、斷簡、脱漏などの問題が発生している。上述した陽渠に關する記事も例外ではない。したがって、文獻資料のみを頼みとする『水經注』の解釋に危険性のある點を本論の冒頭では指摘した。このような事例の一つとして穀水水系に係る金谷水の問題について言及しておきたい。

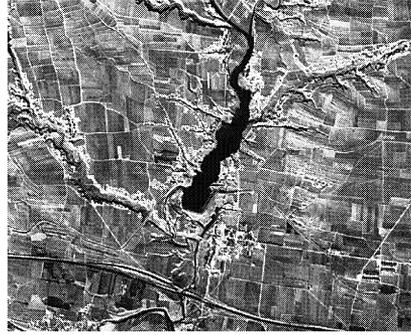
魏晉の洛陽では貴族文化が花開いたが、中でも、石崇隱遁の廬が營まれた金谷に集った潘岳をはじめとする金谷二十四友の活動は廣く知られるところである。では、洛陽の文化活動の據點ともなった金谷、並びにその谷を形成した金谷水とは何處に所在するのであろうか。

『水經注』穀水條では千金場・石梁（鞏門橋）・石梁（西梁）に關する件と金墉城に關する件との間に金谷水に關する記事が組み込まれている。

穀水又東、又結石梁、跨水制城、西梁也。／穀水又東、左會金谷水。水出太太原、東南流、歷金谷、謂之金谷水。東南流、逕晉衛尉卿石崇之故居也。石季倫「金谷詩集・敘」曰、余以元康七年、從太僕卿出爲征虜將軍、有別廬在河南界金谷澗中、有清泉茂樹、衆果竹柏、藥草蔽翳。金谷水又東南流、入于穀。／穀水又東、逕金墉城北、魏明帝于洛陽城西北角築之、謂之金墉城。（穀水また東し、また石梁を結び、水を跨ぎて城を制す、西梁なり。／穀水また東し、左に金谷水と會す。水は太太原に出で、東南流し、金谷を歷る、これを金谷水という。（金谷水）東南流し、晉の衛尉卿、石崇の故居を運るなり。石季倫の「金谷詩集・敘」に曰う、「余、元康七年（二九七）を以て、太僕卿に從り出でて征虜將軍となる、別廬の河南界金谷澗中に在るあり、清泉、茂樹、衆果、竹柏、藥草、蔽翳あり」と。金谷水また東南流し、穀に入る。／穀水また東し、金墉城の北



圖八— 鳳凰臺開析谷（左斜め上から右斜め下への直線的影線）



圖八—二 金水河河谷（左手が新安縣から来る本流、右手ダム湖が灑水との分水嶺である横川郷から来る支流）

Base: CORONA satellite photographs are available from U. S. Geological Survey, EROS Data Center, Sioux Falls, SD, USA.

を巡る、魏の明帝、洛陽城の西北角においてこれを築き、これを金墉城と謂う。

上掲の記事の順序から解釋するならば、灑水と大城西城壁の間を探索すべきである。然るに當該區域には、居住空間として利用できる廣饒な河谷を形勢している河川ないし河川の痕跡は見出せない。強い比定するならば、孟津縣鳳凰臺村南側の開析谷ということになる。この見解は顧祖禹の『讀史方輿紀要』に載せられ、以降金谷を鳳凰臺の開析谷に充てるのが通説であった。筆者も當初は同様に考えていた。確かにCORONA衛星畫像（以下衛星畫像とのみいう）では小河川の影線が確認でき、現地調査においても河道の痕跡は確認した（圖八一

一）。しかしながら、谷底はV字形を呈し、邱山邊緣部に展開する開析谷と形態は何ら變わらない。若干規模の大きい古街道が設けられた夏門・穀門から北に延びる開析谷と比べても狭小であり、谷間に住居を営む空間的餘地を見出すことはできない。

一方、現在の金水河は王城遺址の西方に位置しているが、『水經注』穀水條には新安の函谷關以東で王城までの間に南流して穀水に入る中規模河川の記載はみられない。楊守敬『水經注圖』のように澗水條をこれに充てる解釋もあるが、澗水に関する記載そのものが曖昧（穀水と澗水とが混用されている）であり、金水河の形状と一致する内

容もない。金水河は、河南省新安縣正村の西南に源を發し、孟津縣を経て、黒龍洞より洛陽市（郊區）に入り、洛陽市黨灣村にいたって澗河、すなわち穀水に入る。全長二五キロメートル、流域面積二一〇平方キロメートル、河床は粘土および亞粘土質である。現在非増水期でも斷流は見られず、河川の規模としては瀍水に匹敵する。注目すべきは黨灣村の北側である。其處では西北（新安縣正村）より流れ来る本流と北（瀍水との分水嶺にあたる孟津縣橫川郷）より流れ来る支流が合流するが、その近傍では本流支流ともに極めて大きな河谷を形成している。衛星畫像では河岸段丘を有する廣大な河谷が確認できる（圖八一二）。では何故に『水經注』では當該河川に關する記事を缺くのか。鳳凰臺開析谷と金水河河谷の地勢を比較してみるに、筆者は注文に錯簡が生じていると考える。すなわち、現在の金水河が金谷水であり、その注文の件が『水經注』輯校の段階で前後して挿入された（本來ならば王城の前に入るべき）と考えるものである。論據は以下の六點である。⁽⁵⁴⁾

- ① 『隋書』卷三〇地理志では金谷水は新安縣の縣域に屬している。新安縣は隋唐洛陽城の西隣である。
- ② 五胡初頭に劉曜は石勒と對峙した際、金谷に駐軍している。また、隋末に楊玄感も金谷に駐軍している。⁽⁵⁵⁾ 一時的にせよ大軍が駐屯するわけであるから大規模な河谷が必要である。
- ③ 洛陽出土墓誌を通覽するに、金谷郷、金谷原と明記される出土地は、紅山と稱される洛陽市西北端の區域から洛陽空港のある冢頭村近郊に至る區域に展開している。⁽⁵⁶⁾ 現金水河の東側丘陵區域にあたる。一方、一九二七年に鳳凰臺村から發掘されている隋□和墓誌には葬地として河陰鳳凰郷鳳凰里と明記されていることより、鳳凰臺は元來鳳凰の名を有する地であることが理解される。⁽⁵⁷⁾

④ 潘岳「金谷集作詩」〔『文選』祖饒〕には「朝發晉京陽、夕次金谷湄（朝に晉京の陽を發し、夕に金谷の湄に次る）」とあり、潘岳の閑居より石崇の金谷別邸までの距離が大方理解される。潘岳の閑居について外村中は「閑居賦」〔『文選』卷一六志下）を詳細に分析し、洛水および禮制建築群との位置關係から漢魏洛陽城の南、南城壁と洛水河岸（北岸）と

の間にあったとみる⁽⁵⁸⁾。誠に卓見であり筆者もこの見解を支持するが、この比定地を以って、朝に閑居を出發し夕方に金谷に到る、という上記の内容を考えるに、徒歩（毎時四キロ程度）にて七時間程度と假定してみると、二八キロ前後の距離を想定する必要がある。漢魏洛陽城の靈臺遺址から金水河の河谷にある紙坊村までの直線距離は約二七・五キロである。因みに靈臺遺跡附近から鳳凰臺までは約一二・五キロ、筆者の足でも四時間程度である。朝出發すれば午前中には着いてしまうことになる。

⑤ 『晉書』卷三三石崇傳には「崇有別館在河陽之金谷、一名梓澤、送者傾都、帳飲于此焉（崇が別館の河陽の金谷にあるものあり、一に梓澤と名づく、送者は都を傾け、ここに帳飲す）」と記す。梓澤については金水河の上流部（横水郷の南側に源流をもつ支流、孟津縣常袋郷一帯）である⁽⁵⁹⁾。河陽については郭長軍が石崇「金谷詩敘」との對比において『晉書』の疏誤を指摘している⁽⁶⁰⁾。その視點を踏まえて墓誌資料を通覽してみると唐代の墓誌ではあるが「楊仁方」（葬地：邙山穀陽郷金谷里、出土地：冢頭村と盧村の間）「楊基」（葬地：洛州河南縣穀陽郷金谷里、出土地：洛陽市）では穀陽郷の金谷里とみられる⁽⁶¹⁾。よって穀陽と河陽とを取り違えたものと考えるべきであろう。穀陽の金谷とすれば、金水河の左上流域まで含めた區域を想定して然るべきである。

⑥ 金墉城の手前の翟泉村内で穀水が枝分かれしていることは考古學調査で既に確認されている⁽⁶²⁾。然るに、『水經注』には分枝に關する記載は全くみられない。金墉城の北を経て東行する流路の行程を記した後、南行する流路については閭闔門を通過する時點から突如として記載が始まるという状況である。東行および南行する流路が示されていることから西北隅で分流していることは明確である。また、金谷水の件の末尾より金墉城の件の冒頭に至る二六字（上掲附線部）は戴震の増補であるが、その典據も明確ではない⁽⁶³⁾。このような點から、金墉城に繋がる一連の件の中に脱漏も含めた混乱が生じているとみるべきである。鳳凰臺開析谷への比定は『水經注』における金谷水の件の挿入位置にあることから、その是非の如何で據り所を失うことになる。

以上、金水河を金谷水に、そしてその河谷を金谷に充てて考えるべき論據を示した。金谷を金水河の近傍に充てて考えるという方向性は二〇〇三年に地元研究者である郭長軍により提示されたものであるが、論據が曖昧で多分に主観的な傾向を有していたことから、筆者としては取り立てて氣に掛けることもなかった。しかし、『水經注』穀水條における穀城縣城の所在を考えるために行った金水河流域の踏査の過程で、『水經注』に金水河の存在が抜け落ちている點を見出した。同時に、並行して行ってきた鳳凰臺開析谷の環境調査では石崇の「金谷詩敘」にみられる果樹園や池沼の成立する空間が鳳凰臺の開析谷には存在しえないことが理解され、潘岳閑居と石崇別廬との距離關係からみても金水河を金谷水に充てて考えるべきであると確信するに至った。⁽⁶⁵⁾

結 語

筆者は、洛陽盆地の中央に位置し、後漢・魏・晉・北魏王朝の都として數百年の永きに渡って經營された漢魏洛陽城（及びそれを取り巻く集落立地）を長年に渡り研究の對象としてきた。卓越した歴史環境を有する點、そして郊外の農村部に展開するため遺跡の保存環境に優れているという點を以って、都城存立の要因をその環境との關係において考究する上で餘りある情報を収集できる存在であると認識したからにはほかならない。本論では、洛陽という巨大な都市が營まれる上に必要な水環境、その中でも取分け重要な地表水系である穀水について述べてきた。もちろん洛陽が卓越した地下水脈の上に營まれている點も理解しておかなければならず、⁽⁶⁶⁾また洛水、伊水、漣水水系の問題も含め『水經注』や『洛陽伽藍記』の再檢證という課題も控えている。本論の議論が漢魏洛陽城に止まらず中國古代都城の存立環境を考究する上での布石となれば幸甚である。

註

(1) 東洋文庫前近代中國古代地域史研究班では輪讀の底本として北京科學出版社版の熊會貞稿本影印本(一九五七年)

を用いているが、本論への引用については近刊の陳橋驛復校『水經注疏』(江蘇古籍出版社、一九八九年)を底本として使用している。錯簡、錯誤など大きな問題がある点についてはその都度注記を加えるが、疏文の扱いなどに言及する紙幅がないことから、『水經注』の經文および注文を本文中に引用する場合、基本的に陳橋驛復校本を用いるものとする。疏文も含めた研究については東洋文庫前近代中國古代地域史研究班の成果として逐次刊行している(既刊『水經注疏譯注』渭水編上二〇〇八年、下二〇〇一年)。

(2) 洛水と伊水の二大河川の河床は砂礫質である。このことから洛陽盆地の地下には多量の地下水が貯藏されており、洛陽盆地では現在でも至る所で地下水を利用しての灌漑が展開されている。洛陽はまさしく水瓶の上に營まれているのであり、國都として多くの人口を抱える都城に最も必要な飲料水の供給という問題に關して卓越した條件を有している。都城の水環境という動もすれば地表水に視點が集中しがちであるが、飲料水として利用される地下水の重要性も忘れてはならない。本論では紙幅の都合上、地表水について言及するに止める。地下水の貯藏狀況については、拙著『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』

雄山閣、二〇一〇年、五五・五六頁を参照されたい。
河川の名稱標記については、基本的に穀水、洛水、伊水、

瀘水などのように舊河川名を用い、金水河のように現河川を特に意識した場合のみ現名を用いる。

(3) 中國では外國人による發掘・測量は原則として許可されてはいない。したがって、筆者の言う調査とは踏査(社會科學院考古隊了承)である。然れども漫然と逍遙するものではなく、『水經注』『洛陽伽藍記』などの文獻史料を如何に讀み解くかを前提とした實地調査である。毎回調査區域を劃し、地表面の狀況、地形の形狀、および耕地斷面における地層の確認作業を主として行なうものであり、散在する遺物、文化層中に包含される遺物の確認調査も並行して行なっている。二〇〇四年より〇九年にかけて當該調査法により洛陽盆地内部および丘陵部の狀況は可能な限り把握した。本文中に言う現地調査の情報公開とは、上記の成果を公開するという意味である。なお、本論では漢魏洛陽城大城内の水系に關する言及を避けた。現在考古隊によつて斷續的に調査が行われている最中でもあり、文化層の堆積の複雑さなどを勘案するに、輕々に議論を加えることはいたずらに推測を重ねることにしか成りえないからである。

(4) 洛水舊河道については拙著『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』前掲註(2)、二一八・二一九頁を参照されたい。

(5) 九六城と稱される漢代の城址を指す。北魏では外郭城が設けられることから内城となる。なお、本論の内容に前漢期に觸れるところはない。したがって、本論に言う漢とは

後漢を指すものとする。また漢魏洛陽とは後漢より北魏に至る洛陽をいう。

- (6) 一九五九年の開鑿とされる中州渠は、現穀水と現洛水の合流部より、穀水が洛水に注ぎ込む返り水の水壓を利用して作られたもので、北岸の段丘上を東に流し老城へと導くものである。老城近くになると、現洛水との高低差は一〇メートルに達し、さらに邙山からの等高線は北より南へ引かれるのに對して、中州渠は老城の南側から等高線に逆らつて南より北へ流れているのである。しかし、その規模に比して當該工事に關する資料は少なく、さらに短期間で終了している。古陽渠の遺構を再利用もしくは參考にするかたちで現在の中州渠が設計されたことは想定してしかるべきであろう。拙著『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』前掲註(2)、一三二—一三六頁。

- (7) 劉曙光は洛水からの引水の危険性と地勢的にみた場合の非現實性を説く(劉曙光「漢魏洛陽研究四札」『中原文物』一九九六年特刊)。この點で筆者の見方と軌を一にする。ただし、城南の區域を通過するのみで十分とするならば洛水からの引水も視野に入れることができる。

- (8) 洛陽盆地の河川情報については拙著『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』前掲註(2)「洛陽盆地の水文環境」四二—五四頁を参照されたい。

- (9) 現河道の状況は『水經注』穀水條「韋昭曰、洛水在王城南、穀水在王城北、東入于灑。至靈王時、穀水盛、出于王城西、而南流合于洛。兩水相格、有似于鬪、而毀王城西南

也。穎容著春秋條例言、西城梁門枯水處、世謂之死穀、是也(韋昭曰く、「洛水は王城の南にあり、穀水は王城の北にあり、東して灑に入る。靈王(紀元前五七一—紀元前五四五)の時に至り、穀水盛なりて、王城の西に出で、而して南流し洛に合す。兩水は相い格し、鬪するに似たるあり、而して王城の西南を毀すなり」と。穎容は『春秋條例』を著して言う、「西城梁門が枯水の處、世にこれを死穀というは、これなり」と。)にみる死穀とほぼ一致する。

- (10) 『後漢書』の本紀中には開鑿に關する記事は見られない。王梁傳の記事が「五年、從いて桃城を救う、云々」「七年、有司劾してこれを奏す、云々」の兩記事の間に置かれていることから、建武五年(紀元二九年)の開鑿が想定されるのみである。王梁傳では渠首の具體的な地點が明らかにはならず、完成後に水が流れなかつたという點も氣にかかる。
- (11) 史念海「我國古代都城建立的地理要素」『中國古都研究』第二輯、浙江人民出版社、一九八六年、二二頁。

- (12) 段鵬琦「漢魏洛陽與自然河流的開發和利用」(杜金鵬・錢國祥「漢魏洛陽城遺址研究」科學出版社、二〇〇七年、一六七—一六九頁、原載「慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集」文物出版社、一九八九年)。

- (13) 李潤田「自然條件對洛陽城市歷史發展的影響」『中國古都研究』第三輯、浙江人民出版社、一九八七年、一八二—一八三頁。

- (14) 楊寬「中國古代都城制度史研究」上海古籍出版社、一九九三年、一四五頁。

- (15) 假にこの渠道が存在し得た場合、洛水の河道變更の要因として理解することができる。社會科學院考古隊では、西石橋村あたりから漢魏洛陽城の南を抜ける渠道があり、これに元代の河川大増水期に河水が一氣に流れ込んで河道變移を起こしたとみている。しかしながら、具體的な渠道を指摘しておらず、『水經注』に洛水から直接大城の西南に到る水系が示されていないことから漢魏期における大城西南の渠道の存在には否定的である。漢魏洛陽城放棄後に建設された新洛陽城(隋唐洛陽城)の漕運に用いられた渠水に關係があると考えるべきであろうか(錢國祥『漢魏洛陽城遺址研究』「前言」前掲註(12))。
- (16) 拙著『東漢魏晉南北朝都城境域研究』洛陽博物館文化叢書、二〇〇九年、七九～八二頁、『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』雄山閣、二〇一〇年、二二六～二二七頁。また、推定穀水舊河道が東周王城と隋唐洛陽城の設計規格と密接な關係を有している點についても後者二二八～二三〇頁にて詳述している。
- (17) 洛陽市考古隊のボーリング調査(鉛探)報告も昨今刊行されるにいたった(洛陽市文物鉛探管理辦公室『洛陽市文物鉛探報告』第一輯・第二輯、文物出版社、二〇〇八年)。しかしながら、王炬「谷水與洛陽諸城址的關係初探」(『考古』二〇一一年第一〇期)中に引用されているボーリング調査報告は『洛陽市文物鉛探報告』には収録されていない新情報(洛陽市文物工作隊資料室收藏の内部資料)である。
- (18) 洛陽市文物鉛探管理辦公室資料室「二〇〇八年一月洛陽市文物鉛探管理辦公室・洛陽市第二文物工作隊鉛探」(王炬「谷水與洛陽諸城址的關係初探」前掲註(17))。
- (19) 洛陽市文物鉛探管理辦公室資料室「二〇〇八年一月洛陽市文物鉛探管理辦公室鉛探」(王炬「谷水與洛陽諸城址的關係初探」前掲註(17))。
- (20) 洛陽市文物鉛探管理辦公室資料室「一九八八年七月洛陽市文物鉛探管理辦公室鉛探」(王炬「谷水與洛陽諸城址的關係初探」前掲註(17))。
- (21) 拙著『東漢魏晉南北朝都城境域研究』(前掲註(16))は二〇〇九年三月の刊行時點で洛陽市文物考古隊、社會科學院考古隊など洛陽市の考古學關係者各位には漏れなく行き渡っている。現地において考古關係者には洛陽盆地の水系復元を含む環境考古學の必要性を説いてきたが、洛陽市文物工作隊の王炬の論考によりその成果が實證されたことは大變に意義深い。
- (22) 拙著『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』前掲註(2)、二二七頁。
- (23) 鄭州大學歷史學院・洛陽市文物工作隊「洛陽東周王城東城牆遺址發掘簡報」『文物』二〇〇八年第八期。
- (24) 洛陽市文物工作隊『考古年報』二〇一〇年。
- (25) 含嘉倉に關する發掘報告書としては、河南省博物館・洛陽市博物館「洛陽隋唐含嘉倉的發掘」『文物』一九七二年第三期と洛陽市文物工作隊「洛陽含嘉倉一九八八年發掘簡報」『文物』一九九二年第三期とが挙げられるが、これらの報告中には河道遺構に關する説明はみられず、掲載の圖

- 版(圖四)の中で遺構の存在が確認されるに止まる。一九七四年の發掘(古倉街南端の洛陽鐵路分局職工醫院改築現場)に係る河道遺構の状況は、方孝廉・謝虎君「洛陽含嘉倉的發掘與研究」(洛陽博物館建館五〇周年論文集)洛陽博物館、大象出版社、二〇〇八年)の中で示されている(六七~六八頁「含嘉倉漕渠碼頭(埠頭)發掘」)。
- (26) 王炬「谷水與洛陽諸城址的關係初探」前掲註(17)、八一・八二頁。
- (27) 拙著『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』前掲註(2)、一二八頁。
- (28) 北魏以前には王城の西北から西城壁沿いに「死穀」と稱される舊河道があつたが(『水經注』穀水條)、これに再度河道變移を生じたものが現在の河道である。その地勢から王城の西北に引水地點が想定される。これに對し、本文に擧げた『述征記』の記事から王城の東北に渠首が設けられたことも想定される。現地の地勢(南北に一二メートル以上の高低差がある)をみるに洛水の河道が王城の北側を回る可能性は皆無である。この状況から洛水を引き入れた先すなわち引水の到達地點として『述征記』の内容は理解する必要がある。なお、王城の東城壁の外側に春秋戰國以前に河道が存在したことが圖三から読み取れる。外濠と理解すべきであるが、春秋戰國期の層位の上面にある漢代の堆積が河道の沖積であるとは報告書(前掲註(23))には記されていない。『述征記』の内容との關係についても今後考えていかななくてはならない。
- (29) 灑水水系の諸問題については拙著『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』前掲註(2)、二二〇~二二六頁、千金塢遺址については二二九頁を参照されたい。なお、九龍臺より下流は平坦な地形となるため灑水は河道變移を引き起こしている。
- (30) 中國社會科學院考古研究所洛陽漢魏故城工作隊「北魏洛陽外郭城和水道的勘查」『考古』一九九三年第七期。なお筆者も分金溝村の西端三一〇國道脇の下水管敷設工事の際に(二〇〇五年一月)淤土の沖積を確認している(拙著『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』前掲註(2)、九四頁)。「水經注疏」の疏文には、「會貞按『洛陽伽藍記』、出閭闔門外七里、長分橋。中朝時以穀水峻急、注于城下、多壞民家、立石橋以限之。長則分流入洛、故名曰長分橋。或曰、晉河間王在長安、遣張方征長沙王、營軍于此、因名張方橋(會貞按ずるに、『洛陽伽藍記』、閭闔門を外に出ること七里は、長分橋なり。中朝(晉朝)の時、穀水の峻急にして、城下に注ぎ、多く民家を壞すを以て、石橋を立て以てこれを限る。長じて則ち分流し洛に入る、故に名づけて長分橋という。或はいう、晉の河間王長安にありて、張方を遣はし長沙王を征するに、軍をここに營す、因りて張方橋と名づく」とあり、長分橋(張分橋)の所在を語るものと解釋している。
- (31) 錢國祥『漢魏洛陽城遺址研究』「前言」前掲註(12)。
- (32) 中國科學院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城初步勘查」『考古』一九七三年第四期、中國社會科學院考古研究

- 所洛陽漢魏故城工作隊「北魏洛陽外郭城和水道的勘查」前掲註(30)。
- (33) 遺構は南北一〇四八メートル、東西二五〇メートル、三城から成るが、近年の調査では最南端の城址(丙城)が魏の明帝期に造られ八王の亂の舞臺となった所謂金墉城であるとされる。北方にある二つの城址(甲・乙城)については、北魏期の路面遺構の上面にあることより如何なる遺構であるのか、北魏金墉宮との關係等々今後議論されるべき課題である。中國社會科學院考古研究所洛陽漢魏故城隊「漢魏洛陽故城金墉城址發掘簡報」『考古』一九九九年第三期、錢國祥「漢魏洛陽城遺址研究」『前言』前掲註(12)。
- (34) 『水經注』穀水條では漢廣陽門(北魏西明門、I號城門)より城内に入る渠道、ならびに漢中東門(北魏東陽門、IX號城門)と漢望京門(北魏青陽門、X號城門)から城外に出る渠道が記されているが、考古學調査では未だに確認されていない。なお、Ⅷ號城門(漢上東門、北魏建春門)では磚築溝道が確認されているが、幅は〇・七〜一メートルと狭く渠道に係る城内よりの排水溝とは考えにくい。中國社會科學院考古研究所洛陽漢魏故城工作隊「漢魏洛陽城北魏建春門遺址的發掘」『考古』一九八八年第九期。
- (35) 中國社會科學院考古研究所洛陽漢魏故城隊「漢魏洛陽故城金墉城址發掘簡報」前掲註(33)。
- (36) 七三年報告では當該遺構を第三支と結び附けて考えたが、金墉城の調査報告「漢魏洛陽故城金墉城址發掘簡報」(前掲註(33))ではこれを改め七三年報告中で描出した河道痕を消去している。第三支は開鑿時期が下るとみられることから、當該河道痕は第二支に充てて考えるべきである。
- (37) 明堂遺址は靈臺と辟雍の間に位置し、南北四〇〇メートル、東西三八六メートル、中央に位置する夯土基壇は圓形を呈し、その直徑は約六二メートル、高さ二・五メートルである。圓形基壇は中心に方形の建築物を配し、周圍を圓形の回廊が取り巻くというプランを有している。『洛陽伽藍記』卷三城南には、正光中、辟雍の西南に明堂が築造されたことが記されているが、前代からのものを活用したのか否かは判然としない。錢國祥「漢魏洛陽城遺址研究」『前言』前掲註(12)。
- (38) 靈臺遺址では南北四一メートル、東西三一メートル、高さ八メートルの夯土基壇が残存している。中國社會科學院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城南郊的靈臺遺址」『考古』一九七八年第一期。
- (39) 中國社會科學院考古研究所「漢魏洛陽故城南郊禮制建築遺址」一九六二〜一九九二年考古發掘報告」文物出版社、二〇一〇年、第三章辟雍遺址。
- (40) 大城東南隅の状況として楊守敬は『水經注圖』の中に東に向かつて分枝する渠道を書き込んである。これに對し、周祖謨「北魏洛陽伽藍圖」(森鹿三「洛陽伽藍記・水經注(抄)」(中國古典文學大系二一、平凡社、一九七四年)添附の「北魏洛陽伽藍圖」は當該圖に依據)では東南隅の渠道を描かず、大城東城壁の中央部から東に向かう一條の渠道のみ表記している。七里橋の所在からみても渠道の表記

- では不自然なところが認められる。周祖謨『洛陽伽藍記校釋』（中國古代都城資料選刊、中華書局、第二版、二〇一〇年）。
- (41) 錢國祥『漢魏洛陽城遺址研究』「前言」前掲註(12)。
- (42) 偃師市文物管理局「漢魏洛陽城東陽渠・鴻池陂考古勘察簡報」『華夏考古』二〇一一年第一期。
- (43) 偃師商城の中央部を東西に貫く水溝の存在は以前より確認されていた。杜金鵬・王學榮『偃師商城遺址研究』、科學出版社、二〇〇四年。
- (44) 鴻池陂遺址の所在は『水經注』穀水條に引く『百官志』に洛陽の東二十里と記される里程に符合すると考古隊は考えている。偃師市文物管理局「漢魏洛陽城東陽渠・鴻池陂考古勘察簡報」前掲註(42)、一三五頁。
- (45) 偃師市文物管理局「漢魏洛陽城東陽渠・鴻池陂考古勘察簡報」前掲註(42)、一三三頁。
- (46) 偃師市文物管理局「漢魏洛陽城東陽渠・鴻池陂考古勘察簡報」前掲註(42)、一三五頁。
- (47) 『水經注』卷一五洛水條に「洛水東、逕九曲南、其地十里有坂九曲（洛水東して、九曲の南を逕る、其の地は十里に坂の九たび曲するものあり）」とあるのはその例證である。
- (48) 九曲瀆を陽渠南道とするならば、都水使者陳狼が穿った洛口より九曲を経て青陽門にいたる運渠（『水經注』穀水條に引く傳暢「晉書」）とは正にこの南道を指すといえよう。
- (49) 『水經注』穀水條では鴻池陂の記事の後ろに七里澗および旅人橋（石梁）の記事を入れる。ところが、橋は洛陽宮を去ること六・七里」とあり、これは發掘された鴻池陂の遺構との位置關係において里程が全く合わない。錯簡の可能性を視野に入れておく必要がある。錯簡が認められる場合、七里澗および旅人橋（石梁）は考古隊が確認している自然溝の何れかに比定することもできよう。この他、穀水條では毫殷の南を陽渠水は通過している。毫殷を偃師商城遺址に比定するか否かは今後を期す問題であるが（昨今では松丸道雄の伊尹城説も有力である。松丸道雄「關於偃師商城和伊尹關係的假説」『三代考古』三、二〇〇九年）、酈道元が偃師商城遺址を毫殷と認識していたならば、その中央部を貫通している水渠遺構は内容的に矛盾する。商城遺址の南側を通過するもう一條の水渠が存在していると考えるならば矛盾はない。
- (50) 偃師市文物管理局「漢魏洛陽城東陽渠・鴻池陂考古勘察簡報」前掲註(42)、一三三、一三五頁。
- (51) 偃師縣城の所在については拙著『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』前掲註(2)、二〇八―二一〇頁を参照されたい。
- (52) 『讀史方輿紀要』卷四八河南三河南府洛陽縣金谷澗には河南府（現在洛陽市老城區）の東北七里とする。
- (53) 拙稿「洛陽から四方に通じる大道とその遺跡」『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版、二〇一一年、一四八―一五〇頁。

(54) 金水河の河谷（黨灣村北）を以て金谷を考へることの見通しについては、拙稿「白居易の暮らした洛陽」（『白居易研究年報』第一〇號、二〇〇九年、一三三頁）にて既に表示している。その際、①②③を據り所として所見を述べたが、その後考證を重ね更なる論據を得るにいたった。

(55) 『晉書』卷一〇三劉曜載記、『隋書』卷六三楊玄感傳。

(56) 葬地に金谷の銘を持ち、出土地が郷村レベルで特定されるものに限定した金谷關係墓誌資料を示すが、紙幅の都合上資料中には氏名、出土地（洛陽市略）、所載資料に限って記載している。なお、洛陽地區出土墓誌の卒葬地に關しては、余扶危・張劍『洛陽出土墓誌卒葬地資料匯編』（北京圖書館出版社、二〇〇二年）を参照されたい。

元瓌（張羊村の西北、冢の南、①⑤⑥）、陳府君夫人王氏（谷水鎮の東、④）、高安期（北楊凹村の南、③④）、妓人張氏（張嶺村、③）、李捨持（孟津縣營地村、②③）、楊基（冢頭村、盧村の間、③）、高愛（西北王山、③）、李夫人（西陡溝村、③）、元濬（北營里村、②③）、樊氏六娘七娘九娘同葬（孟津縣王山の西南、②③④）、元思忠（冢頭村、③）、王夫人（李凹村、②③）、元眞（營里村、②③）、張□夫人源氏（苗溝村、③）、盧伯卿夫人崔氏（營里村、③）、劉茂貞（營里村、②③）、盧氏夫人（水泉村、③）、楊思立（水泉村、③）、李燁（張嶺村、③）、李同（張嶺の南地、③）、呂君夫人李氏（盧村、②）、陳□夫人王氏（谷水鎮の東、④）、公孫思觀（冢頭村、③）、張羊（孟津縣後李

村、③）、索行（苗家溝、②③）、夏暉（營庄村、②③）、李智（半坡村、③④）、李岐（東陡溝村の西北、③）、梁璵（東陡溝村の西、③）、寇鎬（冢頭村、③④）、李夫人（冢頭村、③）、蘇日榮（營里村、②③）、陳曦（谷水鎮東、④）。以上三三例。

（上記所載資料）①趙萬里『漢魏南北朝墓誌集釋』科學出版社、一九五六年、②河南省文物研究所・洛陽地區文管所『千唐誌齋藏誌』文物出版社、一九八四年、③洛陽古代石刻藝術館『隋唐五代墓誌匯編』（洛陽卷）天津古籍出版社、一九九一年、④洛陽文物工作隊『洛陽出土歷代墓誌輯編』中國社會科學出版社、一九九一年、⑤趙力光『鴛鴦七誌齋藏石』三秦出版社、一九九五年、⑥毛遠明『漢魏六朝碑刻校注』線裝書局、二〇〇八年。

(57) 鳳凰臺について出土地が確認される唯一の資料である。卒日・天保四年（五五三）一〇月二六日、葬日・開皇九年（五八九）一〇月一日、趙萬里『漢魏南北朝墓誌集釋』前掲注(56)、圖版三七六、洛陽古代石刻藝術館『隋唐五代墓誌匯編』（洛陽卷）前掲注(56)、一一一一。

(58) 外村中「西晉の潘岳の閑居と山水論について」『ランドスケープ研究』六八（二）、二〇〇四年。

(59) 趙振華・何漢儒『唐代洛陽鄉里方位初探』『洛陽出土墓誌研究文集』（洛陽古代藝術館編、朝華出版社、二〇〇二年）では第四節で梓澤について現在の孟津縣西南部に充てて考へている。一九三六年洛陽市王村出土の北魏「赫連悅墓誌」には葬地として梓澤が記される。唐以前の梓澤の區

域について唯一確認できる墓誌資料である。趙萬里『漢魏南北朝墓誌集釋』前掲注(56)、圖版五八八。

(60) 郭長軍「金谷園方位諸説之辨析」『河洛春秋』二〇〇五年第四期。

(61) 楊仁方墓誌・河南省文物研究所・洛陽地區文管所編『千唐誌齋藏誌』前掲注(56)、上冊六八頁、洛陽古代石刻藝術館編『隋唐五代墓誌匯編』(洛陽卷)前掲注(56)、三一—二八。楊基墓誌・『千唐誌齋藏誌』上冊六九頁。

(62) 金墉城については一九九五年より九七年にかけて社會科學院考古隊による發掘がなされ、編號丙城が魏晉期の金墉城であり、俗稱阿頭墳なる小土丘が百尺樓の遺構であることが確認されている(中國社會科學院考古研究所洛陽漢魏故城隊「漢魏洛陽故城金墉城址發掘簡報」、前掲注(33))。注文に示される金墉城を丙城に限定すると、東、南への分枝については魏晉段階ですでに存在していなければならぬ。

(63) 戴震校訂の官校宋本による。永樂大典本には當該記事なし。楊守敬は、『資治通鑑』卷七十二注引「水經注」に「金墉城在洛陽城西北角」とある點、並びに『文選』贈答三陸士龍「爲顧彥先贈婦詩」注引陸機「洛陽記」および『通典』卷一七七河南府洛陽縣に洛陽城の西北の角に金墉城があると記されることより、戴震の増補を是として注文に揚げている。金墉城の所在確認という點のみに楊守敬の

議論はあり、金谷水の問題まで含めた視點を有していない。

(64) 郭長軍は紅山鄉寨坪村(金水河東岸)に比定する(郭長軍「今日寨坪村當年金谷園」『河洛春秋』二〇〇三年第二期)。また二〇〇五年末、郭長軍は鳳凰臺、河陽、白鶴鎮三説の矛盾からこれらを否定し、そこから寨坪村の正當性を導く論考を發表した(郭長軍「金谷園方位諸説之辨析」『河洛春秋』二〇〇五年第四期)。鳳凰臺説、河陽説以外にも白鶴説が挙げられる。白鶴説は王正新「金谷園遺址考」『河洛春秋』二〇〇〇年第一期により提示されたものであり、石崇「金谷詩敘」にある「河南界」を黃河南界(南岸)と解釋し、金谷園遺址を白鶴鎮東北二里の黃河灘中とするが、郭長軍は「縣」字の缺落で河南縣界と解釋している。『太平寰宇記』卷三河南府河南縣金谷には石崇の「金谷詩敘」を引いて「有別廬在河南縣界金谷澗中」と記す。ここでは「縣」が確認できる。郭長軍の見方は的確である。

(65) 洛陽市の中心部にある解放路、洛陽驛の西南では金谷の名稱を冠する地名が現存する。唐の苑園「金谷園」の所在地とされるが、その比定も含め本来の金谷および金谷水との關係は明確ではない。

(66) 拙著『千年帝都洛陽——その遺跡と人文・自然環境——』前掲注(2)、五五—五六頁。

本論のCORONA衛星画像については、米國情報公開法に基づき、京都大學大學院人間・環境學研究科地域空間論分野の協力により使用している。

but with that reign of Emperor Wu, it began to be more bureaucratized and expanded. This began with the full development of the organization of the *menxia*. Considering the result of the examination of correspondence of the *neichao* and the *menxia* of the *junfu*, we can see that they shared a common directionality. That being the case, the formation and strengthening of the *shangshu* and *neichao* that began in the period of the reign of Emperor Wu of the Former Han can be grasped as a nation-wide reaction and that was not limited to the central government.

A CONSIDERATION OF THE WATER RESOURCES OF THE GUSHUI RIVER IN LUOYANG DURING THE HAN-WEI PERIOD

SHIOZAWA Hirohito

In examining the environments that sustain cities as large-scale settlements, there is no questioning the fact that the water environment is an essential issue. This article deals with the extraordinary city of Luoyang during the Han-Wei period, and in examining its geographic location and the character of its river water in terms of quality and quantity, the existence of the Gushui 穀水 River, the third river of the Luoyang Basin, is recognized as the most important element of the water environment in sustaining the city. In this article, I publish the results of local surveys conducted intermittently while I was in Luoyang, as well as a reconstruction of the Gushui waterways based on the reports of new excavations and the locations of systemic water-related archaeological sites and argue the place of the Gushui in the context of the environment sustaining the city.

The mere mention of Luoyang brings to mind the geography of the city governed by the Luoshui 洛水 River. However, the difference in relative elevations of the base of Mt. Mangshan 邙山 and the river's course is great, and thus there were many difficulties in making use of the Luoshui. People thus sought to use the Gushui (the modern-day Jianhe 澗河 River). However, it was the Yangqu 陽渠 Channel that was the irrigation channel that drew water from the Gushui. I had previously proposed the location of the Yangqu Channel on the basis of my topographical survey, and with the successive publication of the results of

archaeological surveys, my view has been confirmed as of 2011. While making reference to the latest archaeological findings, this article considers the various problems of the Gushui water system, such as the condition of the old course of the Gushui, the method of using the Yangqu Channel to transport water, the location of the Qianjin Barrage 千金壩, the water circulation problem of Luoyang Castle, the role of the moat of the Biyong 辟雍 imperial ceremonial site, and the existence of two waterways, the northern and southern, within the eastern district of the Yangqu.

Additionally, in considering the culture of Luoyang in the Wei-Jin period, the problem of the site of the Qingu valley 金谷, which was the location of the activities of the Twenty-Four Comrades of Qingu 金谷二十四友, also arises. Given the fact that the gullies below the Fenghuangdi 鳳凰臺 tableland in Mengjin 孟津 Prefecture were unsuitable for human habitation according to the *Shuijingzhu* 水經注, this area is inappropriate. On the other hand, there is no record of the Qinshuihe 金水河 River, which corresponds to the Chanshui 灑水 River on the western edge of the Luoyang Basin, in the *Shuijingzhu*. Using evidence from other written sources such as epitaphs, I have discovered a misordered portion in the text of the *Shuijingzhu*. The Qingushui 金谷水 River is in fact the Qinshuihe, and as it was precisely a river valley blessed with an excellent water environment, it was also a place where nobles of the Wei and Jin would go into reclusion.

This precise information on the Gushui above is likely to become a basic, indispensable source for the study of Luoyang during the Han-Wei period. Exploring the water environment that is essential to the human living environment, we can glimpse an aspect of the environment required to sustain the large-scale settlement (city) that was Luoyang in the Han-Wei period.

THE LEGACY OF BABUĀB: A PORTRAIT OF AN INNER MONGOLIAN AND HIS FAILED QUEST FOR MONGOLIAN INDEPENDENCE

NAKAMI Tatsuo

With the collapse of the Qing dynasty due to the outbreak of the Xinhai Revolution in October 1911, Mongol nobles and high-ranking Buddhist priests in the